■前角老師を讃える

――西来の祖道　我東に伝う――

第二回育英生　河内義宣

右の句は言うまでもなく、道元禅師さま山居の詩の第一句です。仏法東漸といわれ、インドから中国、朝鮮、そして日本に仏法が伝えられましたが、その間を往来した人の数は『シルクロード往来人物辞典』によると、道元禅師以前に、名前のわかってるだけで二千名余になります。そのうち日本に来た外国人、日本から朝鮮、中国等に往来した人は約千名います。

これらの中には仏法と関係ない人も多数含まれいますが、そうした中で自分こそが真実の仏法をもたらしたのだという道元禅師の自負がこの第一句に感じられるのではないでしょうか。

そして、道元さまから七百年、仏法は更に太平洋をこえてアメリカにわたり、約百年、今や完全にアメリカ社会の中に根を下ろしたと言えると思います。鎌倉円覚寺の釈宗演老師をはじめ、安谷老師、中川老師、千崎如幻師等の不惜身命の努力がありましたが、自らアメリカの国籍をとり、アメリカ人の奥さんを持ち、アメリカ人になりきって伝道教化に尽くされ、師家分

上の多くのお弟子を育てあげられたのは前角老師お一人でありましょう。老師御自身の胸中、道元禅師のようなご自負もおありになったのではないかと拝察するところであります。

私は第二回留学僧として、ロスアンゼルスとニューヨークに遊ばせていただき、多くの人に接し、参禅辨道のあり方を見て、中国にダルマ様がこられ、初期禅宗が発展してゆく様子とイメージを重ねあわせ、一切の爽雑物（葬式、法事、声明等々）を混じえないで直に禅の第一義

に参じてゆく、その清新潑剌さに感激を覚えたものでした。

一方、ニューヨークのグラスマン徹玄先生のゼン・センターでは作務にたいへん重点がおかれ、労働の中にこそ修行があるというあり方で、余分なことを考えている余裕がないほどベーカリーでの仕事は厳しいものでしたが、そのことに前角老師は、中国仏教（特に禅門）史の中で百丈禅師が坐禅修行の中に作務をとりいれられたことを述べられて、さらにそれを発展させるものであるという評価をされておりました。

労働の中に修行がある、労働こそが修行というあり方は、白隠禅師なども「動中の功夫は静中の功夫に勝ること百千万倍」といわれていることもあるのですが、臘八の摂心も、この労働こそが、ここニューヨークゼンセンターの臘八摂心であるといわれると、ちょっと首をかしげたくなったのですが、前角老師がそのように積極的な評価をされているのを聞き、さすがに新しい文化の中で布教をされている老師は見方が大きいなと思ったことでした。

最後にもう一つ老師の思い出を申しますと、ある時の閑話に「和尚、寺の住職はつらいですね、自分が実行できないことも話さなくてはならないから」と言われたことがありました。行解相応、解、悟りの智慧があれば、それにともなった行・日常生活がなくてはならない、それこそが修行の眼目であるわけですが、行も解もまったくできていない私にはまさに三十棒でありました。

（釣学院住職）

■前角老師追悼

前角博雄老師を追悼す

第六回育英生　安藤嘉則

本年五月、老師の遷化の報を聞いたときには、本当にただ驚くばかりであった。ちょうどその頃、東隆眞先生より、アメリカの黒田研究所(Kuroda Institute)の東アジア仏教研究の最新刊 The Scripture of Ten Kings(『十王経』)を中外日報に紹介するように、とのご推薦を受け、その原稿を来日中の前角老師にお見せすべく、なんとか脱稿したのであった。そしてその拙稿を前角老師にお渡し下さった東先生から、老師が大変およろこびであったことを伺い、大変うれしく存じていたのであったが、それからわずか一週間もたたぬかの悲報であった。

私は平成二年の夏から秋にかけて、黒田武志育英会理事長にお世話いただき、善光寺海外留学僧(第六回)として、ロサンゼルス禅センター(ZCLA)、マウンテンセンター、ニューヨークのゼン・マウンテン・モナストリー(ZMM=道真寺)、ゼン・コミュニティー・オブ・ニューヨーク(ZXNY)、そしてサンフランシスコのゼン・センター、グリーン・ガルッジ、桑

港寺等を歴訪し、大きな衝撃をもって、アメリカ禅を参学することができた者である。

今懐かしくその参学の旅を振り返るに、多年ロサンゼルスを中心に、禅の伝道教化に奮進された前角老師がアメリカにおいて築き上げたものがいかに多大なものであったのか、あらためて感じざるをえない。ZCLAをはじめ、全米各地に展開する門下のめざましい活動と、その拠点としての施設（禅道場）の充実ぶりがその目に見える形での成果であるといえよう。カリフォルニアの山中の広大な土地に、メンバーたちが手作りで作り上げたマウンテン・センターの仏殿（ブッダ・ホール）・坐禅堂などの堂宇は、むろん日本の伝統的な伽藍様式には及ぶべくもないかもしれぬ。しかしそこには禅のフロンティア精神、禅の西部開拓ともいうべき潑剌とした空気がみなぎっていた。そしてなによりも前角老師の存在そのものがアメリカの人々にとって絶対的なよりどころであったのであり、アメリカ人の心に残したこの決定的な影響力、精神的支柱こそが、前角老師の最大の遺産ではなかったのではなかろうか。

老師がなぜアメリカの人々に対して、あのような指導力を発揮し得たのか、というのは、やはりひとえに老師のもつ仏道への堅固な菩提心と、人種・民族の枠を超えた「弘法救生」の慈悲心に基づくことはいうまでもあるまい。渡米四十年もの伝道生活の原点はまさにここに帰するであろう。しかしまた老師が常に英語によって自在に宗旨を開示することができたこと、そうした語学的な側面も見逃すことはできぬであろう。（残念ながら日本には力量のある師家・老師あるいは『正法眼蔵』などに造詣の深い宗学者はいても、英語に堪能な方はほとんど見当たらないので、なかろうか。）老師の英語による法話（ダルマ・トーク）は実に力強く、確信に満

ちたものであった。そして大衆とともに坐禅に専念された。私が参加した平成二年のマウンテンセンターにおける夏安居中の摂心では、途中で韓国の仏教者会議に参加され、アメリカに帰国するや、すぐに摂心に戻り大衆を接化されていたお姿がまだ目に浮かぶのである。その時老師は、端から見ても、大変お疲れであったようにお見受けした。しかし外遊の疲れをいやす間もなく自ら大衆とともに坐禅をされ、また独参による接化を休まれることはなかったのである。

周知のように老師は曹洞宗臨済宗といった宗派の垣根を超えて、一大事を明らむべく修行に専念されている。こうした老師であったからこそ、確信に満ちた仏法の開示がなされたのであり、臨済や曹洞といった日本的な宗派的発想はほとんど意味をもたぬ、クリエイティブなアメリカ禅においては、まさにこうした参学体験が生かされ、いかんなくその指導力が発揮できたのではないかと思うのである。

老師の急逝に遭い、今更ながら老師の存在の大きさを思い知らされると同時に、これからの老師のお弟子の方々がそのご遺志を継いで、全米へ、そして世界へと法燈盛んにならしめんことを願うばかりである。

（駒沢女子大学講師）

■前角老師追悼

海外留学僧時代の思い出

第六回育英生　沖田玉映

白雲万里の如く　紺碧色の海に雲が広がり、行けども行けども、真っすぐな路、それを挟む様に地平線の見えるかの様な麦や唐きびの畑にカリフォルニアの一番驚かされて、日本より何十倍の拡大な土地のスケールなる印象と今でも深く残って居ります。

大山前角老師も、名前の如く、米国大陸の様に、スケールの大きなダイナミックな人柄で、日本、米国、北欧を伝道教化されました。

老師様の悲報を最初にお聞きした時は、余りにも信じられませんでした。

老師様とのご縁は、横浜善光寺、海外留学僧として、ロスの禅センターに二年間程、お世話に成りました。

大変に快く暖かくメンバーの皆様に親切にして頂いたのも、偏に老師様のお陰と深く感謝して居ります。

老師様が、昭和三十一年に渡米された頃は、日本は経済的にも弱く、言葉では、云い現すことの出来ない程、ご苦労をされたと聞いて居り

ます。無一物の中、数多くの在俗出家の弟子を生み、伝道教化し、その弟子達が、米国から北欧へと禅をとたえる程に成りました。

老師様の平素の生活は、大変に質素をモットーとされ、特に納豆とうどんを好まれ、毎日でも飽きることなく、大好物のご様子でした。日本茶も、それはお茶が白湯になるまで勿体無いと何度も何度もくり返しお飲みになられました。時折、ある材料で日本風のお惣菜を作って差しあげますと、御世辞でしょうか「やっぱり、お美味しい」とニッコリされたお姿を思い出します。米国生活の長い老師様も、やはり日本の味を懐かしく思われていたのでしょう。

又、栃木のご生母様の卒寿のお祝いの手土産に、小さな珍しいサボテンを贈ることになり、どのように梱包して税関を通過するか思案される茶目っ気ぶりを発揮し、いつも、ご生母様へのお心労わりも忘れずいらっしゃいました。

週末は、山のご本宅で過ごされ、ロスの禅センターに戻られますと、家に帰れば、垣根を刈ってくれ等、色々と頼まれるし、休養することも出来ないと、苦笑され、お心の中は、可愛い子供達と一緒に過ごされる時を、喜ばれている様子でした。

東西奔走され席の温まる暇も無く、一生涯を伝道教化に捧げられ、これからは、多くの遺弟をあの世から見守って頂けると信じて居ります。

老師様のご冥福をお祈り申し上げますと共に、老師様の蒔いた種が花を開き実を一つでも多く結ぶ様、増々のご発展を記念申し上げます。

合掌

（玉泉寺住職）